

---

# スプーン 1 杯の幸せ

大沢崇

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スプーン1杯の幸せ

### 【Nコード】

N7061C

### 【作者名】

大沢崇

### 【あらすじ】

犯行現場に意味有り気に残された紙片の謎を解き明かすべく、パズルに挑む桜署鑑識、犬飼恵。しかし作業は難航し、苛立つ犬飼の傍に同僚・大和修が現れる。

**(前書き)**

犬飼君の一人称や大和氏の口調等は、全て書き手の想像です。

パソコンで作業をすると何故だか甘い物が欲しくなる。

ケーキとかジェラートとか強烈な甘味ではなくて、ほんのりと僅かな甘味で良い。

丁度珈琲に砂糖をスプーン1杯溶かしたくらいの。

珈琲持つて来ようかしら、と思いながら遺留品の絵のパズルを組み合わせて行く。

元の絵柄が分からない上に輪郭が曖昧なのでどうすれば正解なのか見当が付かない。

ちよつと苛々し始めた。

マウスを叩く指の力が強くなり、反応の遅いポインタを叱咤するように砂時計を激しく上下させる。

視界の端にプラスチックのカップが現れたのはその時だった。

「ご苦労様」

布地の少ないクールヴィズの装いから見事な肉体を晒した大和氏が隣に居た。

「ありがとうございます」

大和氏の差し出すカップを受け取ると、久しぶりにマウスと右手が離れた。右手が自由だなんて、何時間ぶりだろう。

大和氏は隣のデスクの椅子に座ると、此方のパソコンを覗き込んだ。

「難しいみたいだね、やつぱり」

花なのか、何かのマークなのか。パズルの完成図はさっぱり分か

らない。

「パズルは得意なつもりだったんですけどね」

完成の目処が立たない7ピースのジグソーパズルを忌々しく思いながら、珈琲を口に運ぶ。

そして驚いた。

「……砂糖入ってる」

丁度、スプーン1杯くらいの甘さが、この珈琲にはあった。

「あれ？違かった？」

大和氏も此方と同等に驚いているようだが、大和氏は間違っではない。

「私、大和さんに話しましたっけ？」

パソコン作業の時だけ、珈琲に砂糖を入れる事。

「話はされてないけど、知ってはいたよ。いつもブラックの人が砂糖入れ始めたら気になるもんでしょ」

そう言えば、大学の頃付き合っていた男は自分の利き手を覚えてくれなかった。

「あれ？お前左利きじゃなかったっけ？」

あたしが何時、あんなの前で左手でペン持ったのさ。左手で箸持った事あったっけ？

「お前って酒はバーボンしか飲まないんだよな」

いいえ。バーボンなんか飲めません。

まあ、あの男はあたしと付き合うのと同時に左利きでバーボン飲みの女と付き合っていただけなのだ。

2年も付き合っていたのに、あたしの事は何にも覚えちゃくれなかったのね。あんたにとってあたしって何だったの？

まったく、ろくでもない奴に捕まったもんだわ。

今のあたしの目の前には、スプーン1杯の砂糖も覚えてくれる男が居るってのに。

捧げるなら、大和氏にすれば良かった。

馬鹿な事したな、当時のあたし。

了

(後書き)

『ダージリン』から随分と間が開いてしまいました…。漸く、新作持参で参上です。次回はもっと長い文章を持って来たいと思います。オリジナルで。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7061c/>

---

スプーン1杯の幸せ

2010年10月24日03時52分発行